

No. 78 2019 年



日彫会報

公益社団法人
日本彫刻会

事務所 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-29-18 レジョン・ド・諏訪202号室

TEL 03(3209)1861 FAX 03(3232)0557

<https://www.niccho.com/> email: jimu@niccho.com

— 新たな時代、新たな挑戦 —



第49回日彫展での集合写真

第49回日本彫刻会展覧会を振り返り

日本彫刻会理事長 神戸峰男



平成を締めくくる展覧会として始まり、令和最初の日彫展となった第49回日本彫刻会展覧会は、正会員・会友多くの方々のご尽力と、本会を支えてくださっている皆様のおかげをもちまして、盛会裡に閉会を迎えることができました。入場者数も一人を大きく超えて、近年でも賑やかな展覧会となったと感じております。4月20日のオープニングには洋画家の根岸右司先生、書家の星弘道先生、工芸家の三田村有純先生、洋画家の小灘一紀先生、日本画家の村井正之先生にご臨席を賜り、能島征二常務理事とともに開会の運びとなりました。そして、澄川喜一先生と武田厚先生には外部審査員として特別賞審査にご参加いただきました。諸先生方にはこの場をお借りして、改めて御礼を申し上げます。振り返ってみますと、今回の日彫展は令和時代の幕開けにふさわしく、予てから練ってきた新たな試みが結実した展覧会となりました。新たな賞として「文部科学大臣賞」と「東京都知事賞」が設けられたことは、諸先輩方が築いてこられた日彫展が改めて認められたということでもあり、喜ばしいことです。これは同時に、出品者の前向きな制作意欲を後押しするものであり、展覧会に活力を与えてくれるものとなることを期待しております。

20歳以下を対象とした「U-20日彫展」も大変新鮮な試みとなりました。第1回の今回は手探りの企画となりましたが、結果として19名の応募があり、新たな息吹を感じさせました。6歳を最年少とする未来の彫刻家たちは皆実直に、楽しんで制作と向き合っていて、彫刻の道を目指した頃の気持ちを我々に呼び起こしてくれた気がします。お子さまの出品を支えてくださったご家族の皆様にも感謝申し上げます。

本会の源流である日本彫刻家連盟が歩みをはじめから72年が経ちました。そして、いよいよ来年は日彫展として第50回記念展を迎えます。これまでの足跡を振り返りつつ、記念にふさわしい事業を展開してまいる所存です。重ねて、来年2020年はオリンピック・パラリンピックの年でもあります。近年増加傾向にある外国人鑑賞者に向けた取り組みも視野に入れる必要もあるでしょう。新たな時代に対応できる歴史ある美術団体として、皆様の力と経験を結集して臨んでいきたい所存です。お力添えの程、よろしくお願い申し上げます。

平成31年度 日本彫刻会総会

第90回通常総会報告

平成31年1月26日(土) 午後3時から日展会館において第90回通常総会が開催されました。

出席者 正会員 155名(内委任状118名)

定款17条の定めるところにより総会成立

議事

- 第1号議案 平成30年度事業報告承認の件
- 第2号議案 平成30年度決算報告承認の件・

監査報告

- 第3号議案 第49回日本彫刻会展覧会開催に関する件
- 第4号議案 会員資格喪失の件
- 第5号議案 会員状況承認の件
- 第6号議案 その他の件

全議案とも異議なく承認されました。

報告

- 1 平成31年度事業計画の報告
- 2 平成31年度予算の報告
- 3 新運営委員および新無審査会員の報告
- 4 第49回日彫展審査員の報告
- 5 第49回日彫展会友推挙選考委員の報告
- 6 2019年日本彫刻会選抜展(三越展)及び第12回日本彫刻会新鋭選抜・受賞作家展準備状況の報告
- 7 第50回日本彫刻会展記念事業(案)の報告

第49回日本彫刻会展覧会報告

①会期 平成31年4月20日(土)～5月2日(木)

②会場 東京都美術館 ギャラリーA・B・C
(東京都台東区上野公園8-36)

③陳列点数 295点

(内訳)

正会員 218点

会友 29点

無鑑査(一般応募) 2点

鑑査(一般応募) 27点

U-20(一般応募) 19点

④審査員

特別賞審査員

澄川喜一氏 武田厚氏

審査員長 神戸峰男

能島征二 山本眞輔 山田朝彦

安藤孝洋 石崎義弘 寺山三佳

成富宏 一鍬田徹 山崎茂樹

吉岡徹 元田木山 白石隆幸

白坂弘子 三上健治 (以上17名)

⑤会友推挙選考委員

山崎茂樹 成富宏 安藤孝洋

吉岡徹 (以上4名)



会場風景 ギャラリー C



会場風景 ギャラリー A

⑥受賞者

西望賞	宮坂慎司
文部科学大臣賞	九後 稔
東京都知事賞	田中厚好
会員賞	工藤 潔
日彫賞	窪信一朗 佐藤 実 高橋 忠
優秀賞	菊川 敏 志村広子 田中宏欣
	田村晴江 橋本拓也
新人賞	井上周一郎 大室悠人 紀平佳代
	町野紗恭 山内雄奨
U-20日彫賞	新田智哉 松木大悟 村石しずく
U-20優秀賞	青木雄生 小嶋勇矢 茂木瞭 (以上23名)
⑦会友推挙・正会員推挙	宇杉昭信 柴田茜 塚越孝治
会友推挙	山内雄奨 (以上4名)
正会員推挙	井上周一郎 奥平陽和 金田登夢子
	神山美登里 川向京子 辻村昌久
	富重郁子 御旅屋圭子 宮田耕作
	安田有孝 山田雅英 (以上11名)

⑧入場者数 12,722名

(内訳)

一般	148名
東京都美術館特別展半券	4,456名
招待状	4,821名
招待券	758名
出品者	1,275名
障がい者手帳をお持ちの方	199名
付添者	117名
日本美術家連盟他	44名
65歳以上、大学生以下	561名
パスポート	343名

⑨彫刻研究会

4月20日(土)・21日(日)

審査員による講評を交えた作品解説、研究会を実施しました。

参加者 約120名

⑩彫刻鑑賞解説会(ギャラリートーク)

期間中毎日(4月20日と最終日を除く)

参加者 約155名

⑪彫刻に触れる鑑賞支援活動

a、視覚に障がいがある方のタッチツアー

希望者の申し込みにより実施しました。

参加者 約9名(うち付添5名)

b、盲学校鑑賞教室

4月26日(金)東京都立葛飾盲学校

(中学生6名、教員4名)

東京都立久我山青光学園

(小学生30名、教員18名)

筑波大学附属視覚特別支援学校

(高校生18名、教員6名)

⑫表彰式及び

日時	平成31年4月20日(土) 午後3時半より
会場	東京都美術館講堂
⑬オープニングパーティ	
日時	平成31年4月20日(土) 午後5時より
会場	東京都美術館・レストラン・ミュージズ



表彰式の様子



オープニングパーティの様子

◇日彫展開会式

展覧会初日、十時半より東京都美術館ギャラリーCにおいて、山田朝彦委員長の司会で開会式が行われました。ご来賓として、洋画家の根岸右司様、書家の星弘道様、工芸家の三田村有純様、洋画家の小灘一紀様、日本画家の村井正之様にご参列賜り、能島征二常務理事をはじめ多くの出品者、来場者が集まりました。

はじめに、神戸峰男理事長より、今年の日彫展から東京都知事賞及び文部科学大臣賞が新設されたこと、平成から令和への転換期に開催されること、そして、来年は本展が50周年を迎える記念すべき年となることなどを挙げ、これを契機にさらに日彫会のもつエネルギーが来場者の皆さまに伝わるよう期待する旨のご挨拶がありました。

その後、ご来賓の根岸様と神戸理事長によりテープカットが執り行われ、第49回日彫展が華々しく開幕しました。



テープカットの様子

◇彫刻研究会

今年の彫刻研究会も昨年に引き続き、二部制で開催されました。第一部は、受賞作品を対象とした研究会であり、初日の午後一時より開かれました。第二部は、全出品作品を対象として、翌日の十時半より行われました。

第一部では、廣川政和企画主任の司会で、日彫展の受賞作品である17点と、U-20日彫展の受賞作品である6点を一点ずつ巡りました。それぞれの作品の前で、まず、作者が自身の作品について語り、その後、審査員や参会者が作品について講評する流れをとりました。

作者からは、作品の意図や造形に関する話だけではなく、今回の出品作に至るまでの過程で、素材やモチーフ、表現主題となる思想とどう向き合ってきたかについても話がありました。作家としての核となる本質的な想いが醸成される過程を垣間見ることができました。

審査員からは、授賞に値したポイントについて、一般の方が聞いても分かりやすい言葉で解説がありました。加えて、受賞者がさらに今後伸びていくために、「あえて貶すことで作品を活かす」主旨



研究会第1部

のお話もありました。造形の甘さに関する指摘や、量を絞ることで現われる自身の造形に関する指導などがあり、参会した彫刻家にとっても自作を振り返ることができる時間でした。

第一部の中でも特に、U-20日彫展で受賞した8歳の男児が「制作中に困ったことは特にはないです。とにかく楽しかった。」と答えている様子は印象的であり、彫刻をつくることの喜びを我々に再確認させてくれる言葉だったと思います。

翌日の第二部では、出品者が自作の展示されている場所を基に、ギャラリーA・B・Cそれぞれで分かれました。ギャラリーごとに、審査員が司会進行を担い、まず出品者が自作について話をし、それを参考に審査員や参会者が講評する流れでした。第一部とは異なり、ギャラリーごとに分かれているため、それぞれのまとまりは比較的少人数であり、参会者同士の距離も近く、互いに意見を交わす姿が見られました。また、今年は審査員の作品も巡って作品解説と講評が行われ、審査員間でもアドバイスのやり取りが行われるなど、作家同士の交流の場としても有意義な研究会となりました。



研究会第2部

◇日彫友の会の活動

視覚障がいのある方々への彫刻作品を「触れて鑑賞（みる）」という取り組みは、昭和40年代より始まりました。現在この準備や実施は、本会会員による鑑賞支援部だけでなく、日彫友の会との協働により実現しています。なお、この日彫友の会には、本取り組みに以前より協力して下さっている視覚障がいのある方々も在籍しています。

鑑賞支援の準備は、まず、触れて鑑賞することができる作品の選定から始まります。触れて鑑賞することを作家本人が了承していること、鑑賞者が触れて怪我などしない安全な作品であること、作品が倒れたり折れたりしない頑丈な作品であることなどを確認し、さらに、選ばれた作品の素材や手触り、モチーフ、表現方法などにバリエーションがあることを勘案して約30点が選ばれます。この段階で、日彫友の会の方にも、当事者の目線から選定作品を確認していただいています。



触れる作品鑑賞の様子

この選定作品を基に、文字と点字の二種類の作品解説文の作成、触れて良い作品のマップの用意、関係機関との打ち合わせなど、スムーズに彫刻を鑑賞していただけるように、日彫友の会とともに準備をします。

そして今年も、視覚障がいのある方々への彫刻鑑賞支援として、一般来場の方を対象とした「タッチツアー」と、事前に鑑賞を希望している学校の児童・生徒を対象とした「盲学校鑑賞教室」が開催されました。それぞれ、本会の鑑賞支援部や会場担当が、視覚障がいのある方に付き添い、会場内の移動や鑑賞のお手伝い、鑑賞中の解説などをしました。触れる鑑賞と一言で言っても、手や指でなでたり、両手で挟んだり、木の香りを感じたり、作品と同じポーズをとってみたり、体全体の感覚を使って彫刻を味わう様子が見られました。鑑賞後の感想では「作品の形だけではなく材料や置かれている場所、環境も表現に関係すると思った。」「色々知っていくとイメージがふくらんできて、どんどん物語がでてくる。」など、彫刻の深いところまで鑑賞されたことが伺える発言から、この活動の意義を改めて感じました。



触れる作品鑑賞の様子



鑑賞後の感想発表の様子

◇ギャラリートーク

初日と最終日を除き会期中毎日、午後二時から一時間ほどのギャラリートークが実施され、連日多くの方にご参加いただきました。

ギャラリートークでは、出品作家が受賞作品や自身の作品を中心に取り上げ、一般の方にも分かりやすい言葉や表現を選びながら作品解説されました。日本彫刻会の概要、彫刻表現の種類、彫刻で扱われる素材、彫刻が出来るまでの流れなどといった「彫刻の入り口の話」から、彫刻作品の量や空間、素材と表現の関係性、自然の造形美などの「彫刻の魅力に触れる話」まで幅広く扱われました。また、作家としての彫刻観や、作品づくりに関わる自身の生活スタイルなど、作り手だからこそ話せる内容も扱われた点は、参加者にとって興味深かったようです。参加者からは、「説明を聞くことで彫刻の見方が分かった」など、彫刻がより楽しく感じられるようになったという感想を伺うことができました。

◇公益社団法人日本彫刻会

50周年記念事業について

日本彫刻会は、1970年社団法人日本彫塑会として新たな出発をしてから来年で、50周年の節目の年を迎えます。戦後間もない1947年、日本彫刻家連盟として出発した頃から数えると実に70数年の歩みを続けてきたこととなります。

この大きな節目の年に来し方を回顧し、更なる飛躍、発展の契機にしたいとの思いから、本年2月に50周年記念事業委員会を立ち上げて、これにふさわしい事業の開催に向けて協議してまいりました。記念事業の規模や内容、予算、併せてオリンピックキヤーでの開催といった時期・企画の問題等、多様な観点から議論を重ねた結果、ようやく事業の概要が固まってまいりましたので、ここで報告をさせていただきます。

1. 「第50回記念 日本彫刻会展覧会」の開催

第50回目を迎える日彫展は記念展として盛大に開催いたします。49回展から東京都知事賞に加え、文部科学大臣賞をいただくことになり、多方面から一層注目される公募団体となりました。会員会友の意欲溢れる彫刻作品の展示を中心として、20歳以下の未来の彫刻家達による「U・20日彫展」「視覚障がい

者を対象としたタッチツア―」、受賞者・出品者を対象とした「彫刻研究会」の開催等、拡がりのある新しい時代にふさわしい展覧会を目指したいと考えます。

2. 「公益社団法人日本彫刻会 特別展『日仏をつなぐ彫刻芸術の系譜―戦後の具象彫刻を牽引した彫刻家たち―(仮)』の開催

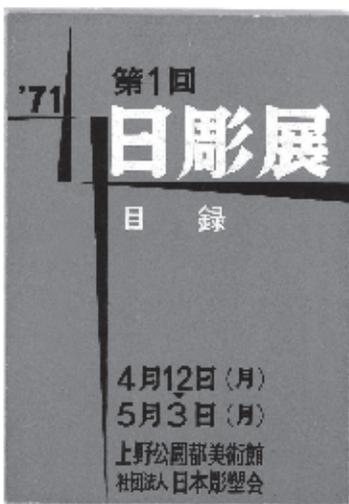
日本近代彫刻が築かれていく過程において19世紀を代表する彫刻家、オーギュスト・ロダン（1840～1917）をはじめとする近代フランスの彫刻家達から受けた影響は大きなものであります。本会の礎を築いた多くの先達が、フランスに憧れ、訪れ、学んでいます。

東京・恵比寿にある「日仏会館ギャラリー」を会場に、「日仏をつなぐ彫刻芸術の系譜」をキーワードとして、1947年日本彫刻家連盟の結成以後、現在に至るまで、公益社団法人日本彫刻会の中心となつて本会を牽引した彫刻家の作品を展示し、日本彫刻会の歩みを展望する特別展を開催します。併せて、オリンピック関連企画として本会会員有志による「記念メダル展」を同時開催するとともに、記念講演会の開催を計画しています。会期は6月下旬～7月上旬の2週間を予定しています。

3. 「50周年記念誌」の編集・発行

30周年記念誌の発行から20年がたちます。この間の記録を「日本彫刻会史Ⅱ(2001・2020)公益社団法人 日本彫刻会(仮)」として編集・発行します。現在、記念誌編集委員会を中心に内容が検討されていますが、50周年記念誌に準ずる内容を基本として、目で見ると日彫会の歴史、展覧会の記録、地方における活動、会報・アートライブラリーからの抜粋記事やタッチツア―などの主要関連事業等について、編集を進めていく計画です。また、「会報(50周年記念号)」（2020年8月発行予定）の発行も予定しています。

来年度は、これらの記念事業に加えて、日本橋三越・アトスクエアを会場とする「日本彫刻会俊英作家小品展」を4月29日から5月5日までの会期で開催します。また毎年開催されることとなった「新鋭選抜・受賞作家展」も銀座・ギャラリー青羅で7月に開催の予定です。50周年という節目の年にふさわしく、日本彫刻会の発展・飛躍の機運を高めていけるものとなりますよう皆様のご協力をお願いいたします。



第1回日彫展の目録

◇受賞者の声

西望賞 「shell-i」 宮坂慎司

遺跡からの出土品のような、人間の痕跡を表す作品をつくりたいと考えている。作品の表層は人間の肌ではなく、存在感の表層であるという意識のもとに制作に臨んでいる。素材感と形態感はい互いに密な関係にあると考える。モルタルの直付けにより、張りのある量感と風化していく脆さが混在する姿を表現した。



文部科学大臣賞 「光のささやき」 九後稔

彫刻の意味とは何だろう。今日も手探りが続く。現代の社会は経済効率や利便性を追求する余り何かを忘れてしまってきたのでは…。災害が日常的に繰り返される不安、そんな心情を作品に込めるのは本来ではないのかも知れないが、この世の安寧を願わずにはいられない。彫刻に光を求めることと、自分の中では重なる気がしている。



東京都知事賞 「風見鶏」 田中厚好

風見鶏は風向計、また警戒心が強い雄鳥の習性から魔除けの意味を持ち、キリスト教勢の発展といった意味もあり「風に向かって雄々しく立つ」と言う肯定的な意味で用いられていた。雄雌2羽を三角形（調和と統合の象徴とされる形）の中で構成しコミカルな表情で表現を試みました。今日の風向きは…さて？



会員賞「流れ雲」 工藤 潔

ふと空を見上げると白い雲がふわふわと流れて行く。走馬灯の様に懐かしい日々が通り過ぎて行った、光陰矢の如し。今を大切に生き新たな時代が穏やかである事を流れ雲に託す。人体のプロポーションを微妙にアレンジし緊張感と包容力を表現した。又、彫刻的關係性に作用を持たせる事に苦慮した。



日彫賞「遙か」 窪信一朗

制作では、一つ一つの形を拾い上げることで、生命感のある作品づくりを目指しています。今回は、上半身を前に傾けることで、大きな動きを出そうと試みました。特に苦心したことは、芯棒づくりと下を向いた顔の制作です。



日彫賞「薫風」 佐藤 実

毎回モデルと向き合うと、人体の美しさに感動させられます。その人体の美しさの中の本質を見つげ出すのが課題です。表面の美しさに圧倒されて本質がなかなか見えてきません。それが表現出来た時に、人に感動を与えられると思います。今回の作品が少しでも何か感じて頂けると幸いです。



日彫賞「蒼天」 高橋 忠

昨秋、去り行く平成の時代を思い、愁いを秘めた女性像「水面」を出品した。今春、新たに迎える時代に、大空、青空、春の空の意を持つ「蒼天」と題しプロポーションは同じくも、未来への希望と決意を表すべく、凜としたポーズと澁刺とした明るい表情にと制作努力した。その思いが少しでも伝えられたら、幸いとしたい。



優秀賞 「ゆく春」 菊川敏

作品制作では、ラフスケッチから始めて粘土でエスキースを作りながらイメージを膨らませていきます。今回の作品のイメージは、そんな時に読んでいた本から受けた印象が影響しているように思います。冒険家を描いたノンフィクションなのですが、生きていくという実感を得るのはどういう時なのか、少し考えることができました。



優秀賞 「うららか」 志村広子

この度は私の作品をとっても高く評価していただき本当にありがとうございます。今回、「こうあるべき」から「こうしたい」という気持ちを大事に制作しました。今あるものに目を留めて。充分幸せであることに気づき『うららか』な様子を自分なりに表現しました。今回の受賞を励みに制作に精進して参ります。



優秀賞 「春を待つ」 田中宏欣

今年の1月、我家にマフラーを巻いた孫が遊びに来た姿を目にした時が今回の発想と制作の始まりです。子供にとつての夢や希望を持つ気持ちを「冬から春へと」という気持ちを表現することが出来ればという思いで制作しました。

この度は大変感謝しております。今後とも、皆様方の教えを被り、石にしがみついて参ります。



優秀賞 「塊々夢の中」 田村晴江

この作品を制作するにあたり、当初、人体を塊(かたまり)で表現するにはどう作れば良いかと考えて制作しました。塊といっても筋肉ではなく、作品全体を一つの塊としてまた、女性の柔らかな表情を漂わせることによりこんな作品になりました。このような坐像は、多くの先生方が制作されておられますので、少し変わったものをご考えましたが、とても難しかったです。



優秀賞 「私の五信条」 橋本拓也

今回の作品は、私なりに彫刻とは？ということと向き合うことに挑戦してみました。私の彫刻とは？ノートに書かれている言葉は、私がこれまで生きてきた世界で感じたこと、思ったことでもあります。これからもこの言葉を信じて生きて行くのだと思います。そして私の彫刻を、自分らしい作品を、これからは作るという意志と決意です。



新人賞・新入選 「潮騒」 井上周一郎

アンデルセンの『人魚姫』に着想を得ました。愛する人のそばにいたい、美声を失くし、最後は泡となる人魚姫。自分の気持ちを伝えられないもどかしさ、そして消えていく悲しみを波の音の意味を持つ「潮騒」に重ねました。人を思うことについて考えさせられる今日、思いを寄せる一途な様を自分なりの形で表してみました。



新人賞 「鴉」 大室悠人

仏像のように繊細な作品を作りたいと思って作り始めました。鴉と人間は街の中ではお互いに警戒し合う存在ですが、両者がひとつになることで生まれる美しさを表現するよう努力しました。



新人賞 「太陽と北風」 紀平佳代

様々な自然災害と共にあった平成最後の1年。私を感わせた自然災害ですが、自然は自然として存在しただけなのかもしれない。そんな思考を「太陽と北風」という寓話をモチーフに表現しました。自然の中にかすかな光を見定め前進しようとする男性像に、自然と共に生きる人本来の姿を写そうと試みた作品です。



新人賞 「午後12時40分」 町野 紗恭

タバコを吸う自分をモデルにし、自分がタバコを吸いながら休憩する日常の切り取りを意図して作りました。自刻像ということもあり、初めて目の前にモデルがない状況で人体を作ること苦勞しましたが、肉体的にも精神的にも自分を見つめ直すことができました。



◇新入選の喜びの声

新入選 「霧」 江崎 壘



新入選 「婦人の水蒸気」 狩野 茂

美術館に置かれた自分の作品を見た。制作中に思った以上にバランスの悪いひどいものだった。人体彫刻を始めて4、5年では、人に言うこともあまりない。今は運慶の、意思を持って立ち現れてくるような像に彫刻の興味を繋いでいる。



新入選 「玉響」 伊藤 奏太

初入選に心から喜んでおります。数多くの魅力溢れる作品と共に展示させていただいたことに大変恐縮です。この経験があり、今はさらに彫刻への情熱を持つことができました。



新人賞 「小さな丘物語」 山内 雄奨

自らを追想し、少年時代に出会った一冊の児童文学書を思い起こしました。「海」や「坂」にまつわる物語が綴られたこの本に未だ見ぬ異国への私自身の憧憬を重ねて具現化しようと試みました。未熟ではありますが、今後も自分自身の経験や記憶を探り起こしながら表現できればと考えています。



新入選 「孫(大きくなったね)」 北野 竹子

このたび、初入選の榮に喜んでいきます。高い年齢で習い始め、粘土の面白さ、不思議さを知り、塑像制作に挑戦しています。作品完成までの大変な難しさを体験しながら、制作できる喜び、楽しさも知りました。未熟な事ばかりですが、一つ一つ努力しながら少しでも高いものを目指し、精進したいと思っています。



新入選 「晦」 菅野 達乱

初作品、初応募、初入選の結果は、作品的にも、己の肉体的、精神的にも、ブランクなものになりました。あまりにテカリ過ぎでしたが、展示では照明を落とすことで見やすくなりました。ご対応いただきありがとうございます。これからもブランクに付き合ひ、こだわり表現していきたいと思ひます。



新入選 「肅」 黒田 雅大

今回の作品を制作するにあたって、作品をあまり気に入っていないという気持ちになることがありました。しかし、日彫展に入選させていただき、自分の作品の良い所や、できていない所に気づく事ができました。作品を客観的にみる目を養い、次の制作に生かしたいと考えています。



新入選 「オカン信仰」 田上万豊

今回初めて乾漆像を作りました。制作中、手に漆がついても一向にかぶれる心配がなかったので舐めてかかっていたら、作品が完成してから思い出したかのようにかぶれました。搔かずに我慢するのが今回一番大変でした。



新入選 「ポーズ」 中島裕子

約20年前に京都の青土社で彫刻の基礎を学んだ後は、油絵を描いていた頃描き溜めた裸婦のデッサンを基に家で小さなものを制作していました。

10年ほど前から母の介護のため一切離れていましたが、入選できて今後の制作への自信となりました。ありがとうございます。



新入選 「習作「女性像」」 洞内史朗

今回の作品は、彫刻の原点である「人間」にこだわり、女性像によって、人体の美しさを表現しようと試みました。残念ながら未熟さが際立つ作品になってしまいました。挑戦したことによって、日彫展という素晴らしいステージに足を踏み入れることができました。これからも、彫刻の奥深さと真摯に向き合って参ります。



新入選 「冬の訪れ」 後藤良和

数年前には彫刻作品を作って公募展に出すなど、少しも考えていませんでした。これまでの巡り合わせと、何よりもこの様な私に彫刻の機会を与えて頂き熱心にご指導をして下さる先生方に感謝しております。能動的に何か作りたいというよりも、ただ目の前のモデルを作るだけで精一杯の状況ではありますが、長くそして楽しく作品を作り続けたいと思います。ありがとうございます。



新入選 「向日葵」 田畑智功

元気で明るい夏の花である、向日葵をイメージして制作しました。自分の理想の女性像の具象化に時間を費やしましたが、形となり良かったです。今回の入選を励みに挑戦の気持ちを忘れないで、継続し続け日々精進して参ります。この度はありがとうございます。



新入選 「Advanced Style」 西里千草

岡山の学生時代、彫刻の授業を受けてから、約半世紀を経て、女性の全身像を制作する機会を得て今回の出品に至りました。身近な年齢を重ねた女性がモデルで、個性的なモードを前向きに纏う姿勢を表現しました。現実トリエ閉鎖が迫り、困難な道に足を踏み入れた感もありますが、題名のように愚直に前進するしかない今です。



新入選 「董」 三好眞理子

粘土での制作時、骨格からくる凹凸や部位への流れなど、自身の顔に触れ確認しながら、また耳の形や位置など模索しながらも出来上がった時には達成感がありうれしかった。第49回日彫展を見学し、作品の大きさ、確実な造形による動きなどに感動しました。これからも制作を続け、多くのことを学びたいと思っています。



新入選 「想い」 小松恵子

この度初めての入選で今改めて喜びを感じております。今回のモデルさんはポーズの合間に本を読む初々しい、可愛らしい人でした。本を形の中に入れる事が出来るかと思いつきながら作り始めました。週一、2時間半の制作は無我夢中でした。最終的に本の表紙が着物の襟となりました。制作している私達を時々見ていた新鮮な目の輝きが忘れられません。ありがとうございます。



◆第1回 U-20 日彫展

今年から新たな企画として、「第1回 U-20 日彫展」が生まれ！未来の彫刻家〜が開催されました。新しい感性を有する二十歳以下の出品者の参加により、彫刻の魅力が幅広く紹介し、併せて次世代の彫刻家の育成を目指した取り組みです。

出品者はインターネットによる無料の出品手続きを行い、作品画像の審査を経て入選が決まりました。その内、特に優秀な作品は、さらに実物による審査が行われ、受賞作品が選ばれました。そして、第49回日彫展及び地方巡回展の会場内では、これらの入選作品の写真がパネル展示され、受賞作品においては実物が陳列されました。

出品者の年齢層は6歳から20歳までと幅広く、また、作品の素材も紙粘土・テラコッタ・石膏・樹脂など様々であり、素材との瑞々しい対話の跡が見られました。何より、つくること自体の喜びが溢れ出る作品が並んだことが印象的な展示となりました。

入選者

新田智哉	茂木瞭	太田愛子
河村美冴	伊藤優子	鈴木杏奈
松尾彩冬	鷺見侑紀	鶴飼星南
長谷川万里愛	佐竹桜	鈴木真菜華
近藤真帆	松木大悟	小嶋勇矢
青木雄生	境野樹里	村石しずく
林颯大		

(順不同・敬称略・計19名)



第49回日彫展での展示



U-20 日彫賞
新田 智哉



U-20 日彫賞
松木 大悟



U-20 日彫賞
村石しずく



U-20 優秀賞
茂木 瞭



U-20 優秀賞
小嶋 勇矢



U-20 優秀賞
青木 雄生

慶 事

第75回日本芸術院賞受賞

「時の旅人」(改組新第5回日展出品作)

池川 直

平成 31年 3月

改組新第5回日展(平成30年度)

内閣総理大臣賞

「合歓の花」 笹山幸徳

東京都知事賞

「harmony」 工藤 潔

日展会員賞

「風眩し」 齋藤尤鶴

◇第49回日彫東海展

会期 令和元年5月14日(火)

5月19日(日)

会場 愛知県美術館ギャラリー

陳列点数 106点

(うち巡回作品77点)

入場者数 1,666名

愛知県知事賞 「ワニのベンチ」 鈴木紹陶武
中日賞 「オカン信仰」 田上万豊
東海テレビ賞 「日本百名山登頂記念」 杉田幸平



彫刻研究会の様子



タッチツアーの様子

今回の東海展は改修工事が終了したばかりの愛知県美術館での開催となりました。本年度より始まりました「第1回U-20日彫展」の受賞作品も同じ会場に展示させていただく事で、上は95歳から下は8歳までと大変幅広い年齢層の作品が集まりました。この幅広い世代の作品を如何に楽しんで頂けるか構想で悩み、実際の展示時も運営の先生方が試行錯誤をして展示して下さいました。おかげ様で会場の雰囲気がとても活気のある良い展示ができ鑑賞者の反応も大変好評に感じました。

また、今年の中日賞受賞者の田上万豊さんの「オカン信仰」はSNSで話題になっていた様で会場に足を運んでいただけの好材料になっていると思われ、SNSがこれからの公募展への入場者動員の力になるのかと感じました。



表彰を受けるU-20日彫展の受賞者

東海展の初日の彫刻研究会は山本眞輔会長の司会の元、神戸峰男理事長を始め本展で文部科学大臣賞を受賞した九後稔会員、遠方は鹿児島より池川直会員と各地から多くの方にご参加いただきました。制作の過程のエピソードや作品に込めた思いなど興味深い話を伺うことが出来、他の作家と自分との相違点を、その作品を前にして確認出来る非常に貴重で有意義な時間となりました。

また、会期中に催した「触れてみる彫刻展鑑賞教室」では毎年、楽しみにして下さっている障がい者と介助者の参加者総勢18名の為に当初設定いたしました基本作品13点に加えて、出来るだけ沢山の作品に触れて頂けるよう多くの作品を準備致しました。案内係の作家の方々の熱心なガイドのおかげで参加者の皆様も彫刻の楽しさを正に肌で感じて下さっていました。機会があれば一般鑑賞者にも触れながら鑑賞していただくのはどうだろうか、次回に向けて検討したいと思っています。

(東海日彫会事務局)

◇第49回日彫北陸展

会期 令和元年6月13日（木）

～6月17日（月）

会場 石川県立美術館

陳列点数 108点（うち巡回作品77点）

入場者数 1,225人

北陸日彫会賞 「RYOH」 石田陽介
富山新聞社社長賞 「misterioso」 川向京子



開会式テープカットの様子



開会式後のギャラリートークの様子



親子彫刻ワークショップ「家族で作ろう。みんなの笑顔」の様子

第49回日彫北陸展は会期前日の6月12日に搬入陳列を行いました。その後、神戸峰男理事長、石川県代表、金沢市代表、金沢美術工芸大学学長、石川県立美術館館長、北國新聞社をはじめ各報道機関代表などの列席のもと開会式を執り行いました。テープカットに続いて村井良樹会員の司会進行で来賓も交えてギャラリートークを行いました。まず、本年度より行われましたU・20日彫展の解説があり、地元石川県からの出品者もいて熱心に説明を聞いておられました。その後理事長が自作について語られ、参加者は、制作に向かう姿勢や心構えを聞き感動しました。また、受賞者によるトークもあり参加者は有意義な時間を過ごしました。

6月16日には日彫北陸展では恒例となりましたワークショップ「家族で作ろう。みんなの笑顔」を開催しました。本年は35名の親子の参加がありました。会場に来られた方でワークショップを見学し次回是非参加したいと言われる方もいました。内容は、まず会員が制作内容を説明して、子供にはアルミの針金を芯棒にして軽量粘土で動物や家族の姿を自由に作ってもらいました。保護者には、スタイロフォームを芯材にして子供の笑顔にチャレンジして頂きました。みんなが笑顔で、また、真剣な目つきで体験していました。

（北陸日彫会事務局）

アトリエ訪問Ⅰ

◇櫻井真理会員のアトリエ訪問

愛知県一宮市は人口三十八万人の県北西部の市であり、かつては織物で知られた、紡績・繊維産業の一大中心地であった。一級河川木曾川の堤防沿いに櫻井真理会員は、アトリエを構えている。

愛知県立旭丘高等学校美術科の古美術研修旅行にて国宝の仏像を鑑賞した際に心を打たれたのが、彫刻を勉強するきっかけとなり、高校にて故柴田鋼造先生より教えを受けた。その後、故野々村一男先生が客員教授であった愛知県立芸術大学彫刻専攻に進み、大学院、研修と七年にわたり彫刻を勉強した。その頃より大学とは関係なく、山本眞輔先生の石膏取りのお手伝いをしていった。日展の先生方に憧れ、大学四年の時に日展に出品するも落選した。翌年日彫展に初入選出来た事がきっかけとなり現在に至るまで出品をしている。

大学を出た後の制作の拠点として二十五歳の時に建てられたのが、現在のアトリエである。



アトリエの様子と木曾川

アトリエを建てるために大学生の頃は、週四日家庭教師を行い、アルバイト代、奨学金、仕送りを元に資産運用を行い、バブル経済の好景気もあり、大学を出る頃にはアトリエを建てるだけの資金が貯まっていた。今では考えられないが、本当に良い時代だったと言う。

アトリエは、実家の敷地内に大学のアトリエを参考に、自ら設計図のようなものを書き、地元の工務店に相談し建てられた。

大きな北窓より自然光が優しく差し込むアトリエは、日中であれば照明は必要なく、五メートル以上ある天井は、等身の制作の際にも天井が気にならない、光と空間を意識したアトリエである。

アトリエに入ると応接室兼倉庫があり、ソファの奥には所狭しとこれまでに制作した作品のマーケットが並んでいる。櫻井会員は日展、日彫展の作品は必ずマーケットを制作し、その全てを型取りし石膏にて保管している。高校生の時初めて制作したベーターヴェンのデスマスクも大切に保管されていた。

石膏取りは、山本先生のお手伝いをしてきた経験から、細部まで気を使って行い、地山の裏まで仕上げる石膏取りは、裏を見れば自分の仕事と分かると言う。



作品マーケットと地山の裏面

制作は月曜日から金曜日の十時から十八時。土日は、家族サービスなどのため、制作は基本的には行わない。奥様は教員で、フルタイムで働いているため、櫻井会員が積極的に家事を行っている。毎朝六時には起床し、朝食の用意をし、家族四人で食事する。子どもと奥さんを送り出し、食材の買い出しや晩御飯の下準備などの家事を終わらせてからアトリエへ向かうと十時頃になる。

アトリエに着くと日頃の雑用の事は忘れ、神聖な気持ちで制作に集中するように心がけている。十八時過ぎには帰宅するようにし、学童より帰った子ども達になるべく早く晩御飯を出せるようにしているそうである。制作は計画的に進め余裕を持つて行うことで、展覧会の搬入ギリギリになることは無いと言う。

一番影響を受けた彫刻は、国宝・弥勒半跏思惟像で隅々まで目の届いた作品は、自分が制作する上で大切にしている事であり、こんな所まで見て作っているとされる作品を、一点でも良いから後世に残したいと思い制作してる。

彫刻のヘラや道具、心棒の針金に至るまで全てが整然と並んでいるアトリエは、櫻井会員の几帳面な性格を表したアトリエであった。



道具やヘラ類

アトリエ訪問Ⅱ

◇田中厚好会員のアトリエ訪問

日本三大観音の一つである津観音がある津市は、三重県中部に位置する都市であり、津駅より五分ほど車を走らせれば、柳原義達記念館のある三重県立美術館があります。さらに、そこから五分ほど走ると、古代象ミエゾウの巨大骨格を有する三重県総合博物館や三重県総合文化センターがあります。このような文化施設の近くに、田中厚好会員のアトリエがあります。

アトリエは、自宅から自転車で五分ほどのところにあり、緑に囲まれた一軒家です。このアトリエは十四年前に建てられたそうで、それまでは自宅の敷地内に八畳のプレハブを置き、そこで二十六年ほど制作をされていたとのことでした。当時、プレハブの床が粘土の重みで抜けるなど、ご苦労があったそうです。それより以前は、自宅の板間で制作をされていました。



現在のアトリエ

アトリエの一階は20畳の制作場で、二階には六畳の書斎があります。制作場には、制作で使う溶接機があり、中央に大きめの机が二つ置いてありました。この制作場は、自身の制作のためだけでなく、造形教室を行う場でもあります。

田中会員は大学生の頃に、文化センターや幼稚園で、子どもたちに造形を教える活動を始めました。卒業後も様々な場で活動を続けつつ、高田短期大学や放送大学において、幼稚園や保育園の先生養成や現職指導として、子どもにとって楽しい造形活動の在り方や意義について教鞭をとりました。そして、このアトリエを建ててからは、ここで子どもたちへの造形教室を開いています。

現在の造形教室は少人数制です。小学生から高校生まで、様々な年代の子どもたちが通い、自分でテーマを決め、自分で表現方法を選択し、自らの表現に責任を持ち、制作に取り組んでいます。そのため、ある子は絵を描いていて、ある子は粘土を積み上げ、ある子は発泡スチロールを切っているなど、一人ひとりが自分だけの造形と向き合う様子が見られます。おおよそ、一つの作品に1〜3か月ほどかけて、じっくりつくるそうです。その成果の一端として、今年のU・20日彫展で入選や入賞を果たした子どもたちもいます。

田中会員は、子どもたちの造形について、具体的な指導や助言をしないように気をつけているそうです。なるべく子どもが自ら発見するような環境づくりに徹し、いい素材が近くにあるように、目に見える位置にあるようにしておき、そこへの気づきを見守るようにしているとのことでした。

時には、近くの工場に制作場所を移動して、工場にある機械などよく観察したり、廃材の色や形や素材感を直に味わったりして、そこから作品づくりに取りかかる造形活動も行っています。

そして、造形教室がない時間帯で、炊事・洗濯・掃除などの家事全般が済んだから、田中会員の制作が始まります。以前は、二人のお子さんの子育てもあり、多岐に渡る仕事をこなす必要があったそうですが、家族の支援があったからこそ乗り越えられ、彫刻を続けることができたそうです。

若手育成と主婦業と彫刻制作、田中会員のそれぞれへの深い思いと、支えてくれる家族への尽きない感謝を垣間見たアトリエ訪問となりました。



子どもたちの造形



工場での造形活動

雨宮敬子先生を偲んで―惜別の思い

常務理事 蛭田二郎

酷暑のお見舞いと日頃のご無沙汰のお詫びなどを綴り記した手紙を差し上げたばかりの8月5日に、突然にその雨宮敬子先生の御訃報を聞かされ、驚き、敬子先生の義妹の祝子様にも急遽電話をいたしました。お話を伺い、ようやく諸事情が分かりました。7月31日にご逝去、8月4日にご家族葬を済ませられたことなどを伺いました。思えば雨宮敬子先生と親しくさせて頂いていたのは、昭和四十四年、改組第一回日展に、私が新審査員として任命された時に、2回目の審査員でした先生に、色々ご教示戴きましたのが最初でした。

先生の審査態度は、公平で、新鮮味の感じられる作品には特に敏感な感性をお持ちでした。私は改めて尊敬の念を持ち、それ以後何度かの審査を共にいたしました。日展の事ばかりではなく、日彫会でも同様で、どれほど多くを学ばせていただいたことか、と今はただ感謝の思いで一杯でございます。

個人的なことばかり記しましたが、日展、日彫会を代表する作家の一人としての先生の存在の大きさは格別で、その存在は私共にどれほどの力と励ましを与えて下されたか、計り知れないと感じております。

そして今、短い文章では書き切れない思いが溢れてきています。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

合掌



第47回日彫展「春・憩い」

◇日本彫刻会選抜展 掌中の美

会期 令和元年6月19日(水)～6月24日(月)

10時～19時(最終日は17時まで)

会場 日本橋三越本店本館6階美術特選画廊

(東京都中央区日本橋室町1-4-1)

日本橋三越本店で定期開催しております「日本彫刻会選抜展」は、好評をいただいた前回に引き続き、副題を「掌中の美」と定め、48名の選りすぐりの小品を一堂に集めた展示となりました。

また、22日(土)には、ギャラリートーク・公開制作が開催され、諸先生方をはじめ、一般来場を含め60名あまりがご参加いただきました。

はじめに山田朝彦委員長の挨拶があり、日彫会の歴史やこの展示の経緯が説明され、廣川政和会員の司会進行で各作家より、作品の意図や材質など各人割り当ての3分を超える語りに、彫刻に対する情熱が感じられました。

また、同時進行にて石黒光二会員による公開制作が行われました。モデルは置かず頭の中でイメージされた女性の首像の制作が、心棒の状態より始まると、前には人だかりができ、普段は見ることが無い彫塑の制作風景に足を止め見入っている来場者が多くおられました。1時間あまりのギャラリートークの中では、時折途中経過が報告され、前髪の形が何度となく変わったり、一度作った所を躊躇無く壊し、量を探る行為に来場者からは、勿体ないとの声がかかるなど、初めて見る作家の制作風景に、興味を示す来場者に混じり、真剣に観察する作家の姿も見取れました。

ギャラリートークが終わると同時に首像が公開されると、会場より拍手が沸き起こり、石黒光二会員より「若い女性の生き生きとしたところを表現した。」と説明があり、「普段はこんなに早く土付けはしない。ここにある作品はもつと時間がかかっている。」と説明があると、来場者より笑いが起こり、和気あいあいとした雰囲気の中でギャラリートーク・公開制作は終わりました。

出品者

中村晋也	神戸峰男	橋本堅太郎	川崎普照
蛭田二郎	能島征二	山本眞輔	山田朝彦
親松英治	青山三郎	池川直	石黒光二
石崎義弘	石田陽介	伊庭靖二	上田久利
江里敏明	勝野眞言	木代喜司	九後稔
楠元香代子	工藤潔	齋藤尤鶴	櫻井真理
笹山幸徳	田中厚好	田丸稔	堤直美
寺山三佳	中原篤徳	中村優子	早川高師
一鉄田徹	廣川政和	榎野仁一	間島博徳
宮崎雅司	山崎茂樹	山下清	吉居寛子
吉岡徹	小関良太	元田木山	白石隆幸
白坂弘子	鈴木紹陶武	宮坂慎司	安田陽子

(順不同・敬称略・計48名)



公開制作の様子



ギャラリートークの様子

◇日本彫刻会 新鋭選抜・受賞作家展

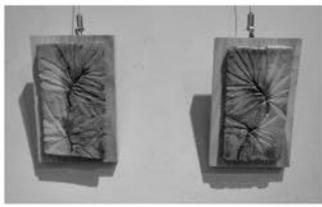
令和元年7月14日～7月20日、中央区銀座ギャラリー青羅にて第12回日本彫刻会新鋭選抜・受賞作家展が開催されました。この新鋭選抜展は若手作家の発表の場として設けられた展覧会で、名称を変更しつつ通算で14回目を迎えました。今回より「新鋭選抜・受賞作家展」と名称を改め、昨年春に上野・東京都美術館で開催されました「第48回日彫展」の受賞者を中心とした20名の発表の場となりました。

今回は共通のテーマを設けず、純粋に個々の制作・研究の成果を示す展覧会を目指しました。これまでの研鑽を辿り、その表現をより深めることを追求した作品や、新たなテーマの可能性を探る挑戦的な作品、楽しみながら自己の表現の在り方を模索した作品が並びました。



ギャラリー青羅 展示風景

展覧会の初日には、神戸峰男理事長をはじめ、遠方からも多くの先生方がご参会くださり、作品を語る会（オープニングパーティー）が開かれました。会の始まりには、神戸理事長よりご挨拶があり、「本展に比べ挑戦的な作品が見られる。このような作品が日展や本展で見られる事を期待している。」と激励のお言葉を頂きました。また、作品を語る会では、出品者が制作の動機や経緯、作品への想いなどを述べた後、一人ひとりに対して来場の先生方から講評を頂き、自身の表現を見つめ直す有意義な時間となりました。



「熊野川」
加山総子



「邪鬼」
武本大志



「あゆむ」
加藤真浩



「ずっとここに、ずっと先へ」
浮森夕菜



「すこし唄ふ」
岩重圭子



「収穫」
秋田美鈴



「夢ん中」
田村晴江



「Yui~kakunodate~」
佐藤励



「After-image」
佐藤徹



「母と話す時」
城谷なるみ



「夏」
重政信明



「まったり」
境野里香



「慥」
川合健介



「The Last kicks」
山本将之



「よく見る、よく言う、
よく聞く」
宮本温子



「威風」
三政洋一



「茄子の精 (夏の実)」
松井みどり



「陽気な
マッド・ハッター」
古井光二



「蜃気楼 II」
長谷川倫子



「青い瞳が呼んでいる」
丹羽俊揮

訃報

左記の方が長逝されました。謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

正会員 平馬 學 先生 平成30年6月
常務理事 雨宮 敬子 先生 令和元年7月

編集後記

◆来年は、50周年記念展になります。当会の会員の皆様の作品を多くの人々に鑑賞して頂く為にも、尚一層のご尽力をお願いいたします。

◆彫刻の専門誌であるアートのライブラリーも本誌(会報)から独立しての刊行20周年を迎え、多くの先生に様々な切り口で彫刻を考察して頂いております。各地の美術館の紹介もごさいますので足をお運び頂けたら幸いに存じます。

◆スマホで気軽に情報を得ることの出来る時代。小さな液晶画面で彫刻作品も見ることが可能となりましたが、大きさ、色彩、マチエール感は、失われがちです。多くの皆様に美術館で作品を見て頂き、お話をお聞きしたいと願っております。

編集委員 川崎義昭 池川直 一鉄田徹 田丸稔

高野眞吾 鈴木紹陶武 永江智尚 武本大志